

知的障害特別支援学校における 情報活用能力育成のためのモデル開発

～卒業後の姿を起点とした「逆引き設計」によるカリキュラム設計～

研究目的

知的障害特別支援学校において、小学部から高等部まで系統的な情報活用能力の育成モデルを開発することを目的とした。

研究方法・研究結果

1. 授業実践

Wiggins & McTighe (2012) が提起する「逆引き設計」論をカリキュラム設計の枠組みとして採用し、「卒業後の生活場面においてめざすべき姿」から逆算して長期的な視点でカリキュラム設計する手法を検討した。

「知りたいことを調べることができる」を高等部卒業後の共通のめざすべき姿とし、学部卒業時の具体的な到達目標については、各実践者が実践する児童生徒の実態に合わせて設定した。「生活場면을意識すること」および「児童生徒が主体的に取り組めるテーマを設定すること」を共通の指針とし、各教員が各自の判断で授業内容を柔軟に構成して小学部、中学部、高等部での実践を展開した。

研究目的	研究内容	研究結果
<p>【研究目的】 知的障害特別支援学校において、小学部から高等部まで系統的な情報活用能力の育成モデルを開発することを目的とした。</p>	<p>【研究内容】 Wiggins & McTighe (2012) が提起する「逆引き設計」論をカリキュラム設計の枠組みとして採用し、「卒業後の生活場面においてめざすべき姿」から逆算して長期的な視点でカリキュラム設計する手法を検討した。</p>	<p>【研究結果】 「知りたいことを調べることができる」を高等部卒業後の共通のめざすべき姿とし、学部卒業時の具体的な到達目標については、各実践者が実践する児童生徒の実態に合わせて設定した。「生活場면을意識すること」および「児童生徒が主体的に取り組めるテーマを設定すること」を共通の指針とし、各教員が各自の判断で授業内容を柔軟に構成して小学部、中学部、高等部での実践を展開した。</p>

研究目的	研究内容	研究結果
<p>【研究目的】 知的障害特別支援学校において、小学部から高等部まで系統的な情報活用能力の育成モデルを開発することを目的とした。</p>	<p>【研究内容】 Wiggins & McTighe (2012) が提起する「逆引き設計」論をカリキュラム設計の枠組みとして採用し、「卒業後の生活場面においてめざすべき姿」から逆算して長期的な視点でカリキュラム設計する手法を検討した。</p>	<p>【研究結果】 「知りたいことを調べることができる」を高等部卒業後の共通のめざすべき姿とし、学部卒業時の具体的な到達目標については、各実践者が実践する児童生徒の実態に合わせて設定した。「生活場면을意識すること」および「児童生徒が主体的に取り組めるテーマを設定すること」を共通の指針とし、各教員が各自の判断で授業内容を柔軟に構成して小学部、中学部、高等部での実践を展開した。</p>

**情報活用能力育成に向けた
フレームワークの開発**

奥村 (2020, p.149) による「逆引き設計」実践のための「単元設計テンプレート」を採用し、知的障害特別支援学校の実態に即して改変した「情報活用能力を育成する授業実践のためのフレームワーク（知的障害特別支援学校用）」を作成し、それを用いて授業を設計し実践したものを収集した。

2. 中教審 (2025a, 2025b) が示す情報活用能力の3要素「活用」「適切な取扱い」「特性の理解」と「逆引き設計」との構造的関係の分析

生活場面でのめざすべき姿を目標に据えた児童生徒の「やってみよう」を引き出す主体的な「活用」を中核に、それを支える「適切な取扱い」としての基本操作やマナーの定着を図り、情報技術の「特性の理解」から「なるほど」という納得感（永続的理解）を得るという構造が有効であることが明らかになった。

	① 活用	② 適切な取扱い	③ 特性の理解
知的障害特別支援学校での指導における共通点	生活場面での差みや困り感の解決が学ぶ動機づけとなっている。	「活用」を通して、基本操作やルール・マナーの育成を図る。 ・（初期）の発達段階の児童生徒の場合は特に「活用」を通して定着を図っていく。 ・主体的に取り組めるテーマでの「活用」であることで「適切な取扱い」についても、目的意識をもって粘り強く取り組むことができる。 ・手書き入力や音声入力、読み上げ機能の活用等、児童生徒の実態に応じたアクセシビリティ機能を活用できるようにする。	児童生徒が「なるほど」と納得する気づき。 →「こうすれば便利だ」「この情報技術これが発展し、自立的な判断・自己決定へつながっていく。」 ・「活用」を通して「なぜそうなのか」「これを使うとどう便利なのか」「どんなリスクがあるのか」という仕組みや背景知識を裏書きを伴いながら理解できるようにする。
必要な要素	・具体的な生活場면을想定した目標に ・児童生徒が「やってみよう」と思えるような主体的に取り組めるテーマや活動の場面を設定する。		
「逆引き設計」での位置づけ	「到達目標」（教員の視点） 「本質的な問い」（児童生徒の視点）	「知識・スキル」	「永続的理解」

考察

本モデルにより、卒業後の生活に直結する「活用」をめざす姿に据えることで、教員間での指導の方向性の共有化が可能となった。「やりたい（活用）」という動機と、「なるほど（特性の理解）」という納得感が組み合わせることによって児童生徒の主体性を引き出す系統的な指導が可能となった。今後は、個々の実態に応じた「卒業後の姿」のバリエーションを増やし、より個別最適な学びに対応できる目標設定のガイドラインが必要であると考える。次期学習指導要領の改訂に向けた動向を注視し、新たな基準との整合性を図りながら、本モデルを柔軟に更新していきたい。

【参考文献】
 ・中央教育審議会 2025a 【参考資料3】教育課程企画特別部会 論点整理。
 ・中央教育審議会 2025b 【資料1】情報活用能力として育成すべき資質・能力の体系的な整理。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 情報・技術ワーキンググループ（第2回）配付資料。
 ・奥村好美 2020 理解をもたらすカリキュラムの設計とは、奥村好美・西岡加名恵（編著）「逆引き設計」実践ガイドブック―「理解をもたらすカリキュラム設計」を読む・活かす・共有する。日本標準。
 ・Wiggins, G. & McTighe, J. 2012 理解をもたらすカリキュラム設計―「逆引き設計」の理論と方法。西岡加名恵（訳） Understanding by Design, Expanded 2nd ed.）。日本標準。